



## ❁ 砂防の現場で感じる地域と人の魅力 ❁

私は東京と埼玉との境にある工業地域と新興住宅地が混ざりあう場所で育ちました。目の前には大きな川と土手があり、広く平地が広がっている土砂災害とは無縁の場所でした。そんな中、土木工学科の大学3年生の時、土砂災害に関する授業がありました。その授業では、土石流やげけ崩れの映像をひたすら見たことを覚えています。その映像の迫力と、毎年数多くの被害が発生していることを知り、初めて砂防に興味を持ちました。

その事があって、砂防事業に携わる仕事がしたいと希望し、最初の勤務地は山梨にある砂防事務所に配属となりました。

春は桜や菜の花などの花が咲き、360度見渡す限り高い山々が綺麗で、夏はとても暑く、冬はすごく寒く感じました。サクランボ、トウモロコシ、桃、ブドウ、柿、山菜やキノコなど、地元の職員の方からの季節の美味しい差し入れが楽しみでした。右も左もわからない新規採用職員にもかかわらず、職場の方々や地元の方々にとっても温かく迎えていただきました。

現場は、崩壊地が沢山あり、河床には土砂が溢れていました。どこまでも続く山道の先にも集落があり、これまで見たこともない景色が広がっていました。人より大きな岩が転がり、1日で何mも河床が変動し、自然の力の大きさを思い知らされました。そして、季節感や地域性がくっきりと際立っているその土地が、とても魅力的に感じました。

出張所の係長として初めての現場に関わったのは、栃木にある砂防事務所でした。火山性の地形・地質が特徴である現場は、土砂流出がとても激しい場所、地盤がすべりやすい場所、冬場は昼間でも氷点下の場所、登山客や観光客の多い温泉地に近い場所、工事用道路がなくケーブルクレーンやヘリコプターで資機材を運搬する場所など、厳しい現場が多くありました。図面どおりに施工しようとしても、土砂流出や湧水など毎日のように現場では想定外のことが起こり、現場の方々や事務所と相

話し調整しながら試行錯誤する、今思えば苦しくも楽しい日々でした。

その後、東日本大震災や平成27年の関東・東北豪雨の後には主に管内とその周辺の災害調査に加わり、平成29年の九州北部豪雨ではTEC-FORCEの管外派遣にも参加しました。美しい山々やそこに住む人々の暮らしが一瞬で変わってしまう土砂災害の恐ろしさを目の当たりにし、事前防災の重要性を痛感するとともに、今ここで何ができるかを必死に考え行動する先輩方の姿から多くのことを学びました。

また出張で様々な地域の現場を訪れる機会にも多く恵まれました。どこに行っても、現場の説明だけでなく、地域の特徴や地元の魅力について熱心に生き生きと案内して下さる地元の職員の方、技術者の方の姿を見て、その度に地域の人々と暮らしを守る砂防事業の重要性とやりがいを強く感じました。

たまたま受けた大学の授業で興味を持った砂防ですが、河川・道路なども所管している今の職場で、就職してからのほぼ大半を砂防の仕事に携わっています。特段、山好きでも、体力に自信があるわけでもないですし、砂防については就職してから学び始めたようなものですが、多くの経験をやる機会を与えていただきました。

私の職場は2年から3年で転勤がありますが、転勤の度、特徴的な土地と魅力的な方々に温かく迎えていただき、このような魅力的な地域の人々と暮らしを守る砂防の仕事ができることをとても嬉しく感じています。

私は今、砂防計画や施設設計の仕事に携わっています。地元の砂防事務所の職員として、地域の特性や現場の特徴を一つでも多く計画・設計に反映し、魅力的な地域の人々と暮らしを守ることに少しでも多く貢献できるよう、これからも日々取り組んでいきたいと思います。

(田中 理恵・国土交通省 関東地方整備局  
日光砂防事務所 調査課長)

